

2022.5
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とよ や 富 薬

5号

第44巻
No.394



カノコソウ *Valeriana fauriei* Briq. (オミナエシ科 *Valerianaceae*)

生薬

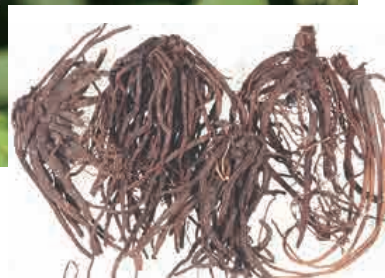
キツウコン（吉草根） 秋、地上部が黄変する頃掘り取る。土を落としながら株分けし、大株を水洗後、むしろ上にひろげて陽乾する。

成分

モノテルペノイド: cineol, camphene, α - β -pinene, limonene, *p*-cymene, borneol, bornyl acetate, bornyl isovalerate, セスキテルペノイド: kessanol, kessylglycol, kessylglycol diacetate, valeranone, fauronyl acetate, knokonyl acetate, cryptofauronol, アルカロイド: chatinine, valerianine、イリドイド配糖体: kanokoside A, B, C, D, patrinoside, valerosidate 等。

効能

鎮痛・鎮痙作用がありヒステリー、ノイローゼ、神経衰弱、神経過敏、精神不安、心臓神経症に用いる。また不眠症、偏頭痛、めまい、耳鳴り、心悸亢進、疝痛、てんかんにも効果がある。



生薬 キツウコン（吉草根）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



中国東北、朝鮮半島、樺太、台湾、日本各地の湿った草地などに自生する多年生草本で、短い根茎から細長いストロンを伸ばし、先に小苗を作り繁殖します。根には2-3%の精油を含み、乾くと臭気があります。茎は直立し高さ30-100cm、白色の長毛があり、根出葉はやや小形で多くは花時に枯死します。茎生葉は対生し1回羽状に深裂して5-7個の羽片があり、羽片は長楕円状披針形から倒披針形で、粗鋸歯があります。初夏に散房状の二枝集散花序を頂生し、密に多数の淡紅色の小さい花を付ける様子が子鹿の背に表われる白いまだら模様から名づけられ、反物の鹿の子絞りが連想されることから鹿子草の名が付いたと言われています。果実は披針形で長さ4mm程です。

中国や日本各地に自生する植物であり、日本薬局方の初版(1886)から現薬局方まで収載されている生薬にもかかわらず本草書の記載は遅く、江戸時代後期までありませんでした。長崎出島のオランダ商館(1641~)に医師が駐在し、日本人医師との交流が始まったことから蘭方医学の医術や薬方についても伝えられ、その中で使われていたと考えられます。シーボルトが用いた薬品として『薬品応手録』(1886)の中に「ハレリヤナ 纈艸」とあるように、ヨーロッパで広く用いられている鎮静薬ワレリアナ根(セイヨウカノコソウ *V.officinalis*)の代用品として国内に自生するカノコソウ(吉草根)が用いられるようになったと考えられます。使っているうちに国産吉草根の精油含量が高く、良質であることが分かってきました。『和蘭薬鏡』(1720)には「野生園生、狭葉潤葉の二種あり」とあり、この頃から栽培が行われていたであろうことが推測されます。続いて「山地、原野、自然生にして狭葉の者、効力尤も峻なり。根の香氣竄透してやや猫尿の臭を帯ぶ。太さ小指の如し。巻く縮せる細鬚多し。園生培養の者は性功劣れり」と根の臭気と形態について述べています。また、『本草図説』(1852)の図は日本産のカノコソウの図で「カノコソウ ハルオミナエシ」として「伊豆山中多く自生す」と産地を記していることから間違いなく国産であることが分かります。さらに「一種草稍小にして常種の如く簇生せず。行く根のびて芽を出すものあり」とストロンを出して繁殖することも記しています。ただ気になるところは「ハレリアナ オッシシナリス(羅)」と学名を記していることです。第四改正日本薬局方でも「纈草 *V.officinalis* var.*latifolia*」とセイヨウカノコソウの亜種としています。*latifolia*は葉の広いことを意味し、国産のカノコソウを指しているものと思われます。この広葉のカノコソウは戦前に神奈川県を中心に栽培されたカメバキソウで、葉の羽片が卵形から披針形で細かい鈍鋸歯をもち、精油が高含量で良品質のカノコソウとして欧米では鎮静剤として、特にドイツではお菓子の香料として多く用いられたことから輸出されていました。生産性が低く栽培が難しかったことから現在は栽培されなくなりました。現在栽培されているカノコソウは北海道産のホッカイキソウ(エゾカノコソウ *f.yezoensis*)で、葉は長楕円状披針形から倒披針形で粗い鋸歯をもち、どちらかというときセイヨウカノコソウに近い形態をしています。精油含量も2-3%と低くなります。

ヨーロッパ原産のセイヨウカノコソウは野生または花壇などで植栽される多年生草本です。カノコソウと比較すると根茎部はやや大きく、根は細い。株からストロンを伸ばし繁殖することはなく、主に種子により繁殖します。根および根茎には臭気があり、精油0.5-1.0%を含みkessyl alcoholを含み、カノコソウに含有するbornyl formateを含まない点などの違いがあります。茎は直立し高さ60-150cm、茎生葉は対生し1回羽状に深裂して7-9個の羽片があり、羽片は長楕円状披針形でより細く、粗鋸歯があります。初夏に散房状の二枝集散花序を頂生し、密に多数の淡紅色の小さい花を付けます。

(村上守一 記)